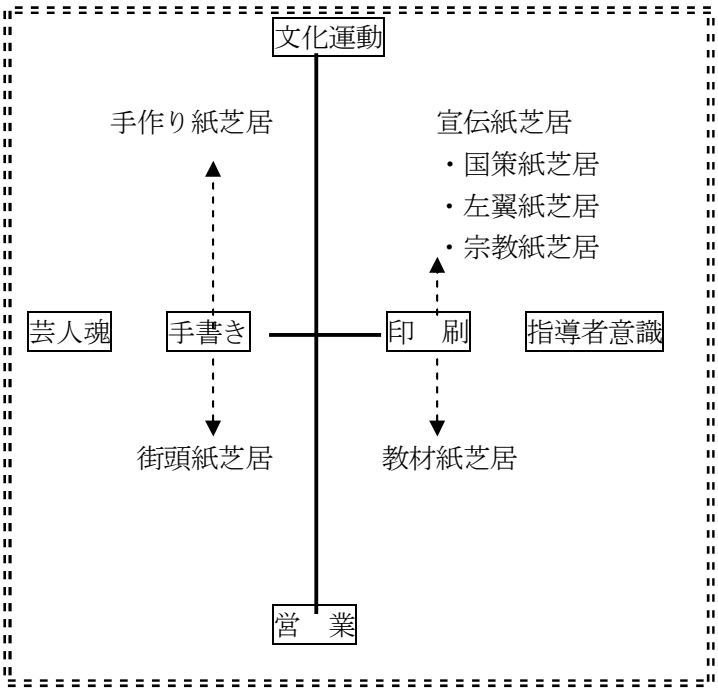
学習会「メディアとしての紙芝居」報告

講師　　鈴木常勝　氏
時間　　平成１８年９月１０日（日）午前１０時より
場所　　富山県総合福祉会館サンシップとやま６０４号室

「紙芝居には良い作品がない」とは、子どもの本を扱う大人がよく言うセリフです。それでも学校図書館や公共図書館には必ず資料として置かれ、それなりに利用があるのが紙芝居です。

講師の鈴木さんは、戦後の街頭紙芝居の衰退期（１９７２年）に魅力にとりつかれ、今も現役のプロの紙芝居師です。紙芝居がどこへ行っても大勢の子どもに喜ばれるのは、子どもの欲しいものをちゃんと提供しているからだと鈴木さんは言います。本にも共通している「感動」「共感」「笑い」「ワクワク」「ハラハラ」「どきどき」の内容があります。それに加えて、演じ手に全ての演出を任せられた街頭紙芝居は「対話」を武器とし、扱う物語が子どもを世間の悪から隔離するのではなく、世間の悪を子どもの前にさらけ出して見せていることが大きいようです。

それでは、他の紙芝居はどうなのでしょう。鈴木さんは見事に分類され、その特長と問題点を解説してくださいました。



宣伝紙芝居
思想や知識の普及を図ることを目的としています。指導意識を前面に出して、採算よりも思想浸透、宣伝効果を重んじます。

教材紙芝居
大人の指導意識に合う内容が重んじられ、見せるかどうかは大人が決めます。

手作り紙芝居
経費は個人もちで知識や楽しみを地域に広げる手立てとして作られます。

街頭紙芝居
駄菓子を売って、その見料として紙芝居を見せます。見る、見ないは子どもが決めます。子どもからの人気が営業を成り立たせます。

「紙芝居はこんな多様な役割を持っています。紙芝居の特性をつかんで、その楽しさと生活文化としての親しさをもっと活かしてください」と鈴木さんは言われます。

街頭紙芝居は、教材紙芝居の指導者から「子どもの低俗な興味に媚びている」といつも非難されてきました。その裏を返せば教育紙芝居は「大人の指導者意識に迎合している」と、鈴木さんは考えます。戦中に作られた国策紙芝居は、脚本を変えずにそのまま読むことを強要されました。その流れをくむ教材紙芝居は、批判にさらされる機会が乏しく、創造精神に欠けるものが生み出されがちです。「紙芝居は良いのがない」というのは、こんな紙芝居の制作経緯に問題があるようです。

そのひとつの改善策として、「まあこれなら」という教材紙芝居に出会ったら、いらない場面を抜いたり、長い説明文を省いたりして、自分で脚本を作り替えるのが有効だそうです。「紙芝居は半製品だと見なしてください。語り手の演出とお客の熱意に支えられて完成品になるのです」「紙芝居はライブなのです」と語る鈴木さんのライブも見せていただきました。紙芝居の面白さと可能性を確かに感じることができた学習会でした。

参考資料：「紙芝居・大人と子どもの出会う場所」鈴木常勝＋金剛かみしばいの会
「紙芝居入門―郷愁から共生へ」鈴木常勝
「メディアとしての紙芝居」鈴木常勝　日本児童文化史叢書３８　久山社